

子どもの自発活動を中心とする保育の計画性について

1. 自然観察

東洋英和女学院短期大学

中沢 和子

I. 研究の位置づけ

筆者らは1972年以降、一連の研究報告を行ってきたが、その内容は主として子どもの認識形成を追求するものと、活動分析を試みるものとに大別できる。この二つの方向は、現在の研究分野の見方によればかなり方向を異にするが、筆者らはこれを統合して、幼児の自発的集団活動を中心とする保育方法を追求しようとするものである。今回はこの立場を明らかにして、保育計画の一例をあげて考察を試みる。

1. 集団の意味

筆者らが集団活動とするのは、画一的に規制した集団行動を指すものではない。

公教育は、少くも数名以上の子どもを集める場であり、ふつう園では子ども達を数十人のクラスに分けて担任をおき、クラスはさらにグループに分けることが多い。この中で子どもは、場と物、子ども相互及び保育者と、必ず何らかの関係をもって生活する。筆者らはこの状態をそのまま子ども集団と呼び、ここで起る活動を集団活動とする。

2. 自発性とその問題点

この集団内で、筆者らは子どもの自発活動を中心とした保育形態を取る。登園後午前中の大部分を自発活動時間とし、おやつ・食事時間のほかは、降園前30分程度を集りの時間とする。年令が進むにつれて課題も与えるが、課題は必ず前後の自発活動と関連を持つことを原則とする。現在までの発表は、すべてこの保育形態で行われた研究である。

子どもの自発性を中心とする保育は、ごく一般に、「自由保育」といわれ、この保育方法について次のような反論がある。

- 1). 自発活動を中心とすれば、保育者はいつも子どもの活動が起るのを待ち、これに従わなければならない。従って保育は計画性を持つことができず、放任となりやすい。
- 2). 自発に任ぜれば、子どもの活動が偏り、すべての子どもに必要な体験を持たせることはできない。

3. 自発活動と計画性

筆者らは、子どもの自発性は保育の場、物と子ども相互の関係、及び保育者の意図的な刺激によって発揮されると考える。従って子どもが活動を起すより前に準備が整えられていなければならない。従って十分な計画性を持たなければならないと考える。

例えば、遊びと自由に遊ばせようとしても、子どもが求める素材・用具・本などがなく、保育者が子どもの動機と理解しなければ、子どもは活動を開始できないであろう。また子どもが活動を開始できる状態にあっても、子ども相互の間に何らかの抑圧があれば自発性を発揮することはできないであろう。筆者らの報告「運動会を契機とする遊びの変化」^{注1}、「自発的集団活動展開の要因について」^{注2}は主として環境準備、子どもの動機と保育者の刺激の構造と追求するものであり、「幼児の集団適応への一試行」^{注3}「計画的グループ編成による自己主張の変化」^{注4}は主に集団内の子どもの相互関係を、保育者が計画的に働きかけて育成を試みものである。以上の結果により、筆者らは子どもの自発性を発揮させるには、十分な計画性を持つこと、集団育成をはかることが必要と考える。

次の問題点については、「幼児の集団活動と物の扱い方」^{注5}「数量の集団指導に対する試案」^{注6}ほかの、主として認識形成を中心とした報告を行っている。ともに今後も追求を続けるものであるが今回はこれまでの結果から保育方法としての具体案を例示し、その計画性について述べる。

II. 自然観察の計画例。(栽培)

1. チューリップを育てる

- 1). 教材：チューリップのほか、地域によって入園後までもなく花が咲く球根で、育てやすいもの。
- 2). 対象：二年保育4文児。三文児でも可能で、この場合4文児期にもう一度繰返す。
- 3). 予備観察：入園頃、花壇に咲いた花を見る。このとき保育者は花の写真をとって大きく伸ばしておく。できるだけ対象児を入れる。できれば園舎の一部も入るとよい。

この後、年長児が球根を掘り上げる時、興味を持って見る子どもが多い。

4). 植え込みと観察

- 植え込み一週間ほど前に、4月にとつた写真を室内にはる。必ず子どもの関心と呼び、子ども相互の間に話掛けが起る。同時に球根に関係ある絵本を多数用意し、子どもが手にしやすい所に置く。
- 数日前に5文児が夏掘り上げて保存した球根を伝達する。子どもは写真の花と球根と結びつける。
- 前日絵本を読みきかせ、球根を手渡して、黒板に図を描きながら植え方を説明する。図は消さないで翌日まで残しておく。
- 当日同じ図を見せてもう一度植え方を確認し、すぐ園庭に出て植える(一斉行動)
- 同時に水栽培を始める。1〜3月にかけて水栽培を見る。この間子どもは各自自発的に花壇の球根が芽を出土のを見る。
- 4月、新5文児はよく花壇の花を見る。花後花軸を摘み、葉が黄色くなる夏前に掘り上げて再び球根を見る。秋新4文児に球根を伝達する。

2. この計画の目標

目標の中心は、植物を通して生命の一巡を感じさせることにある。このために4文児の仕事とし、植えた球根は成長・開花・枯れるのを見て、必ず同じ子どもが再び球根を手にするよう計画する。

3. 自発性を促すための配慮

春とつた写真も掲げることは、子どもの記憶を引き出し、植える球根が春再び花を咲かせることを予想させる。記憶を引き出し、予想を立てさせることは思考力育成の方法である。子ども相互に共通の話題を起し、自発的に本を手にし、植えようとする意欲を起すことができる。

水栽培は、土に埋めて見えなくなった球根を想像する手がかりとなる。また根の成長は、球根から植物一般の根へと想像を拡げる。

水栽培は花壇に植えたものより先きに成長開花するから、植えた球根の成長・開花への予想を持続させる。実際、水栽培の花を見て自発的に花壇の芽の成長を確かめに行く子どもが多い。この間に、子どもは園庭の木や草、土、空、風などを積極的に観察し、季節変化を実感としてとらえる。

4. 平行して扱う教材

4文児春に春まきの種を播く。種はヒマワリ・トウモロコシ、アサガオなど比較的大粒で扱いやすく、必ず再び種を手にするのできるものを選ぶ。生物の成長を実感として捉えるには、子どもの脊丈と近いサイズの種を選ぶと効果が大きい。

春の種まきと秋の球根植えに特に興味を持った子どもには、自発活動として秋まきのエンドウ・コマツナを播かせることができる。コマツナは冬の小鳥の餌となり、春は沢山の花を咲かせてままどやお花屋の材料となり、集団活動を拡大する。4文児期の自然観察は、このような活動内で果たされる。

この基礎があれば、5文児期の栽培は殆どグループ別の自発活動として起すことができる。5文児は発芽・成長の過程をすでに把握しているから、全員同じ種をまく必要はない。それぞれ育てたい物を選べ、ナス・トマトなど苗から栽培するのもよい。多種類の植物を育て、子ども相互に交流すれば、同じものを育てるよりはるかに多様な体験を共有することができる。

III まとめ

自発性は、このように子どもの体験と思考力の裏付けのもとに発揮される。子どもの生活は自然観察のみでなく、他の多くの諸活動を含む。従って年次・年間を通して自発性を中心とする保育を行うには、さらに多層的な計画を持たなければならぬ。

このために、子どもの現在の活動と合併して子どもの本質を探り求め、また活動内で子どもが何を学びとつていくかを追求しようとするものである。

- | | | |
|-----|--------|------------------|
| 注1. | 日本保育学会 | オ30回大会発表 |
| 注2. | 同 | オ31回、32回大会発表 |
| 注3. | 同 | オ30回大会発表 |
| 注4. | 同 | オ32回大会発表 |
| 注5. | 同 | オ26回、27回、32回大会発表 |
| 注6. | 同 | オ29回大会発表 |